

オープンダイアローグ的試み～間接的グループ活動

鹿児島市立名山小学校 溝上茂樹

ことばの教室に通うどもる子どもたちが増え、グループ学習をしたいけれど、様々な都合でできない。そこで、子どもたちに、自分以外にも仲間がいて、いろいろな考えがあることを知ってほしいと思い、ホワイトボードを活用した交流を考えました。ことばの教室に来た子どもたちはホワイトボード上のメッセージを見て、みんなへの質問や自分の意見、感想を書き込んでいきます。

子どもたちはホワイトボードに書かれたメッセージを見るたびに、「どもるのは自分だけではない。会えなくても確かに仲間がいる」ことを、感じ取っていきました。さらに、自分と同じ意見も、ちがう意見もあるけれど、そのどちらかが単純に正しいわけではない。簡単には決められないことを、メッセージによる対話を通して気づきました。そうした経験の中で、自分の思いを分かち合えたと安心しながら、自分と吃音についても、見つめ直し始めたように感じます。

瑛太君（1年生）、浩介（2年生）、唯さん（3年生）、篤志君（3年生）、瀬名君（4年生）、悠也君（3年生）、康太君（6年生）の7名の子どもたちの実際のやりとりの中から一部を紹介します。

1 どもったときに笑う人がいます。どうしたらいいですか。

1年生の瑛太君から、「どもった時に笑う人がいます。どうしたらいいですか」という質問が投げかけられました。

○みんなから瑛太君へ

- ・どもったときに男の子が笑うけど「笑わないで」と言うシーンとなります。
- ・自分で言えるようになったら「笑わないで」と言うほうがいい。
- ・先生に言ってもら。笑ったらいけないよと言ってもら。少しでも早くみんなが知ってくれた方がいい。
- ・まず先生に相談した後に、自分で言ったらみんなも分かってくれると思います。
- ・1年生の時は友達に言ってもらいました。2年生になって自分で言えるようになった。分かってくれる友だちも大事だね。一人で言えない時には友だちに話して一緒に言ってもら方法もあるよ。
- ・わたしは一回だけ、大きな声で言うといいと思う。何回も言うとも友だちとの関係が悪くなると思う。わたしは大きな声で言うけど、けんかになったり仲が悪くなったりはしないです。相手もよく分かってくれる。嫌な気持ちをしっかりと分かってくれているかは分からないけど、笑わなくなっている。
- ・ぼくは小さくても大きくてもだめ、みんなに聞こえるくらいの声がいいと思う。
- ・まず、大きな声で、してほしいことを伝えて、その後で自分の嫌だという気持ちを伝えた方がいいと思います。聞いてくれない人はいないと思います。
- ・「わらわないで」と最初に大きい声で言った方がいい。そうした後に「笑われたら嫌なんだ」と優しく小さい声で言った方がいいと思う。
- ・ぼくは唯さんの意見がいいと思う。「まねしないで」と大きい声で言って、その後、優しくみんなに聞こえるくらいの声で「まねされたら嫌なんだ」と言う。

○瑛太君からみんなへ

- ・きのう先生が話をしてくれた。そしたらみんな笑わなくなった。こんど笑われたら自分で言う。

瑛太君は、笑う友達がなくなったことで、伝えればみんな分かってくれることを実感しました。そして、次は自分で伝えたいと思えるようになっていきます。この瑛太君の「次は自分で言う」ということばに触れ、3年生の悠也君は「1年生で言えたらすごいね。ぼくは分からないけど、言えそうな感じがするんだ。笑われたら嫌だけどね」と自分の気持ちを書いています。

「どもったときに男の子が笑うけど、『笑わないで』と言うとシーンとなります」と、一番最初に書いた唯さんは、他の子どもたちのメッセージを見て『『わらわないで』と最初に大きな声でしっかり言った方がいい。その後に『笑われたら嫌なんだ』と自分の気持ちを優しく伝えた方がいいと思う」と、どうしたらいいか考えた時、実は自分の気持ちを伝えることも大切なんだと気づき、そのことをメッセージに書き足していました。

3年生の篤志君は、ボードにはちょっと書けないけれど「ぼくは笑ってくれるのはうれしい。笑うと友だちが幸せになれるから」と、どもって笑われることに対して、ほかの子どもたちとはちょっと違う、意外な受け止め方をしていることを、教えてくれました。

2 自己紹介

吃音の子どもたちの集まりや少年団の自己紹介で、「学校の名前や学年を話すのに時間がかかった」という3年生の悠也君の体験をもとに、自己紹介についてホワイトボードを使って話し合いました。

- ・自己紹介でことばが出にくいときは「よ」が出ないときに「を」と言う。
- ・自己紹介で、ぼくはどもることばを先に言う。どうしてかというとどもることばを先に言った方が後が楽だからです。
- ・どもってなかなかことばが出なくても、紙に書くなどの方法よりも自分の口で言った方がいい。
- ・自己紹介でどもりのことを言わなくてもいい。理由は少しずつどもりのことを分かってもらったほうがいいからです。
- ・自己紹介は恥ずかしいし、緊張するし、緊張してことばが止まることもあるかもしれないけど、今はしたい気持ちが大きい。なぜかという自分のことを知ってほしいからです。

1年生の瑛太君は、自己紹介について「したくない気持ちが大きいけど、したい気持ちも少しある。どうしてかという自分の名前を覚えてほしいから」「友だちが待ってくれると、したくない気持ちが小さくなって、したい気持ちが大きくなる。嫌な友だちが何か言ってきたら、したくない気持ちがすごく大きくなる。仲のよい友だちが何か言ってきたら少しだけしたくない気持ちが大きくなる」と話していました。相手の反応や相手の好き嫌いによって、嫌な気持ちが変わることを、ことばの教室での対話の中で確認しました。

人と違う意見を言うことは、とても勇気がいることです。そんなこともあり、私は、子どもが何も言わなかったときに、「この子は何にも思っていないんだ」と考えるのではなく、「今はうまく言えないけれど、きっと何か思いや考えがあるのではないか」と意識しながら、子どもたちとの対話に取り組んでいます。そして、どうやったら子どもの考えを聞けるのか、自分がどんな話をしたり、問い掛けをしたりすればいいのか、常に考えるようにしています。

また、対話の中で、これがいいよねと結論づけてしまわないように心がけています。これは、結論づけられないことで、多様な意見が出やすくなり、それが、子どもたちの意見や考えが変わっていく余地を残すことにつながっていると感じているからです。

このホワイトボードを使った間接的なグループ活動で、子どもたちは対話を通して、吃音を学び、吃音の多様な受け止め方を知り、新しい気づきを生み出しています。この新しい気づきは、吃音に対する悩みや不安を少なくし、自らの吃音に対する考え方や生き方を変えていきます。

今後もこのような場を、できるだけ子どもたちと共有していきたいと思っています。